

西真寺 寺報

令和元年 冬号

住職のつぶやき

慈光照護のもと、ご門徒の皆様にはますますご健勝にて念仏相續に御精励のことと、お喜び申し上げます。

さて、暑い夏が終わり日ごとに過ごしやすくなつてまいりましたが、ご門徒の皆様は如何お過ごしでしょうか。

地藏様祭りの任を終えた坊守が、翌日の朝、仕事に行くつもりで支度をしていたところ、急に具合が悪くなり、動けない状態で嘔吐を繰り返しました。私は、坊守が最近始めた遺跡堀の仕事で熱中症になつたのだと思い、救急車を呼びました。

村上病院の救急外来で診て頂いた所、耳の不具合とめまいの症状から、熱中症ではなく、メニエール病と診断されました。一泊で一度退院した翌日に、また同じ発作が起こり、二度目の救急車に運ばれ、一週間の入院となつた訳です。

原因は、ストレスということでした。私が昨年病気になり、私の負担が減るように僧侶資格を取る為の学校に通い、私に負担がかからないように慣れない仕事を始め、PTAや竹灯籠等の地域活動、家事と寺の仕事、子供の受験などが重なつたからであると、症状が出てようやく理解できました。丁度、坊守が仕事を始め、私も掃除と洗濯、夕飯の支度を分担し始めていた頃でした。

入院中、坊守の代わりに全ての負担を任されて、初めて坊守の立場になることが出来、その大変さと偉大さに頭が下がりました。

過去から現在まで、当たり前だと思つていた事柄が、初めて感謝の気持ちに変わっていききました。

南無阿弥陀仏

釋直徳

■影を内に観るか外に観るか④

3. 社会的な現象

我々日本人は、戦前において天皇を中心にした全体主義により、人間を神格化することで英雄像や聖者像を投げかけ、他人に良い面を期待しながら無批判に聖性を高めることに寄与してきました。これは過度に理想化された投影の結果であります。

明治時代に人為的、恣意的に行われた政治支配神話という神の代行作業により民衆の統治が行われ、聖性を高めるための手段が目的化されてしまったのです。この過程において穢れは悪として排除されていき、観念としての善悪は浄穢となり正義と対立する穢悪の概念として現代社会に現象しています。

この我々民族が特異的に現象する、善悪⇄浄穢、正義⇄穢悪という宗教的美意識や死生観は浄穢元型的イメージのはたらきとして説明することが出来ます。そして、さまざまな社会的な現象として表象されていることが理解できるのです。

① 学校でのいじめ

まず、学校におけるいじめですが、この現象は赤坂憲雄が指摘しているように、子羊の生贄という供儀として捉えることができるでしょう。つまり原始的な司祭者による神への生贄を捧げることで、悪霊を追い払う共同行為なのです。人間関係が不安定なクラスにおいて、先生は、リーダーシップを見せ、クラス内をまとめる為に、見せしめの意味から、画一性を重んじるあまり異質性を持つ生徒に対し、執拗な指導や注意を繰り返すことがあります。この結果、教師による影の投影は公然化されて、子供たちにも影響を及ぼしてしまっています。

赤坂は、「学校を舞台として、たがいに分身と化した子供たちが演じ

ている陰湿ないじめという名の劇(ドラマ)は、自己と影・またはオリジナルとコピーのあいだの殺戮であるのかもしれない。みずからの影におびえ、影を憎み、影の殺戮にはげむ子供たち。それが、いじめという名の供犠の基底に横たわる、子供たちの隠された現実の姿であるといつてよい」(『排除の現象学』)といじめに潜む分離と影による現象として説明しています。

親からの虐待や家庭内でのストレスを抱えた生徒達が、生贄を定め、分裂した影を投影することにより、いじめが激化していきます。

生徒は、傍観者から、やる側かやられる側のどちらかに就かなければならないという分断に晒され、決断に迫られながら、不安からの逃避により、やる側に加わるのです。この原理はクライン、マの「妄想―分裂ポジション」の通り、不安な状況から至る傾向として説明できます。

(三十一年夏号参照)

また、集団による影の投影は、穢れたイメージにより高められ、臭い、ウザイ、汚いという異物を忌避する侮辱の言葉を浴びせによつて執行され、正当化され、集団は秩序性を得ることに成ります。このいじめで浴びせる言語は、穢れを悪とする日本人特有な体質によるものです。つまり、いじめは、自分の影と向き合うことが出来ない幼児性から分裂が生まれ、穢れという影を投影する対象に穢れの徴をつけ、排除し、一時的に安心を得る殺戮の為の供犠なのです。

② 部落差別問題

部落被差別の問題では、在日韓国人や、朝鮮人、中国人を中心に異質性の排除が行われ、自分たちが知らない民族に対しては、相手の立場など容赦することもなく、差別の感情をむき出しにしています。在日韓国人や在日朝鮮人に対するヘイトスピーチなどは、その差別心の最たるものです。

そもそも私たちは、蝦夷や沖縄の方々の人権を無視した「私たちは単

一民族国家である」あるいは、「国家国民は汚辱を捨て栄光を求めて進む」と堂々とやる国は、無関心を装い、自分達の本質すら理解できない権威主義的人間の差別心の表れでありましょう。

一方、ドイツのオイゲン・コーゴンが「間違いを犯しながら、そのことに気がつかない、というのはいわゆる我々の本質に属することである」と述べ、ドイツのヴィンゼッカー大統領が、戦後四十周年の記念演説で、「過去に目を閉じる者は現在に盲目になる」と述べていますが、この戦後におけるドイツと日本の歴史観の違いは、いつからどのように捉えられてきたからなのでしょう。

同じ東洋に居ながら経済的に優位性を保持したがる日本の民族性は、戦前戦後を通じて常に自分たちより下の民族としてアジア諸国を捉えています。一方、アメリカに対して戦前は「鬼畜米英」であったはずが、戦後は親米路線に偏向しています。

なぜ原爆を落としたアメリカに追従しながら、侵略した他アジアを批判できるのか、その態度の裏には、アメリカに従うことで、戦前の事大主義の残像を維持しつつ、あくまでも聖戦にこだわり、目下の者に力を誇示するという男の沽券に執着し続けている、少なからず権威主義者の穢れに対する体質があることは否めません。

権威主義者とは、権威ある者には無批判に服従するが、一方では弱者に対して、絶対的な服従を要求する性格を持ち、迷信や因襲、血脈にこだわり、内省することのない人間であると説明されています。これは汚辱、つまり穢れを忌み嫌い、影を投影し、他者を排除してきた人間性を指しています。この体質は国体そのものであり、戦前と戦後で変わりありません。

つまり権威主義者は、大人でも「妄想—分裂ポジション」に位置しており、相手の立場になつて想像力を持ってない、人間の痛みを知らない非常に幼児性に満ちている体質を維持していることが分かります。

(次号に続く)

■神道と仏教の関係③

4. 清明心の記号化

「清明心」とは、アマテラスとスサノヲが「誓約」によつて戦う前、スサノヲが「私に謀反の心はありません」と言い、アマテラスが「それなら、おまえの心は清く明るいことになる。どうしてそれをする事ができよう」という際の「清明心」であります。両者は子どもを生み合ふ『古事記』では勝負が下されなままスサノヲは勝利宣言しますが、スサノヲは罰を下され、追放され、「物質的に」穢れを祓う内容になっています。

この「ウケヒ」とはそもそもインドのマヌ法典に見られ、仏典によれば釈迦の妻ヨシヨダラが、釈迦の出家後六年も経つてからラーフラを生んだので実子であるかが疑われ、水によるウケヒや火によるウケヒで証明した話があります。

湯浅泰雄は、清明心・正直・誠という観念について、いずれも自己中心的な私利私欲な心を排する「集团的帰属性」を意味することを指摘し、清明心は、同時に天皇に対する従順させる意味において「政治的国家的意義」を与えるもので、政治的支配の為のイデオロギーとして「記号化」的な意義を併せもつことを言及しています。

湯浅泰雄は「清明心」の観念について「それは律令国家と共につくり出された新しい道徳理念であり、その意味において、政治的支配のためのイデオロギーとしての意義を合わせ有するものであった」と述べています。私達は、常に日本にあるべき神像を求め続けますが、こ

うした体制的なケガレ観念である「清明心」を記号化した権力イデオロギーにより作り上げられた、投影による虚像であることに気付いていないのです。

鈴木大拙は、「神道がその根源的なるものとして、独自の立場を維持せんとする諸直覚は、靈性的なものでなくて、寧ろ情性の範疇に属するものである。(中略)清明心、丹心、正直心などというものは情性的であつて、まだ靈性的領域に入らない。物忌みするとか、穢れを祓うかということも、今一段の深みを加えて来ぬと、原始民族の心理以外に出ないのである。(中略)何故に、神道的直覚は情性的であるかというに、それはまだ否定されたことのない直覚だからである。(中略)穢れを見てそれを祓うでは、また対象的論理の域をでない。祓われた穢れはまた戻ってくるにきまつている。それが対象界の必然だからである。祓うは感性・情性の世界の事象である。これが靈性的自覚の世界へ来ると、祓うべき穢れもなければ、祓うこともいらぬことになるのである。『あるがままのある』である」と論じています。(太線は筆者)

いずれにしても、日本神話における「清明心」に代表される「記号化」とは、宮廷人らの中国仏教の影響から発生し、原始的な心理構造(供儀)の枠を出ない生理的な憎悪感情に過ぎないということです。

湯浅泰雄によれば古代社会は、皇室を中心とした大和朝廷の中央権力と地方首長層の間に成り立つ支配層相互の関係を政治的上部構造と地方の首長と底辺の人民、すなわち氏子との間に形成された共同体規制の下部構造の二つの構造をもつていたと指摘しています。

以上のことから支配する側と支配される側に二分し、その正統性を血族国家観に成立することを聖性化し、神話構造を社会制度化することが「政治的国家的意義」であることを意味しています。

これが今も続く二分性の原点であり、神道の基本原理なのです。

5. 禊祓の思想

中国におけるイデオロギー操作である「禊祓」の最古の記載は、漢の劉歆（前53?〜23）が書き、後に晋の葛洪（283〜364）が編集した『西京雜記』に「三月上巳、九月重陽、士女遊戯、就此祓禊登高」とあります。続いて南朝梁の宗懔（498〜502—561〜65?）が著した『荆楚歲時記』では、禊祓の日にはちや場所目的まで明確に指摘されているのです。古代の日本が中国の「禊祓」の思想を無批判にそのまま取り入れていることがわかると思います。鈴木大拙が指摘しているように、未だに、「否定されたことのない直覚」であることが理解できます。

古代インドの支配者アーリア人の支配的祭祀であるバラモン教に類似し、後のヒンドゥー教の影響を受け、ほぼ同一化した密教は、同時に日本に「穢れ意識」を持ちこんでおり、空海が書いたとされる「高雄山寺撰任三綱之書」（『遍照發揮性靈集』第九卷）には、「我れ及び仏の弟子に非ざるは、いわゆる旃陀羅（穢れた民）悪人なり。仏法と国家の大賊なり」と記され、これがやがて神道の穢れを祓う呪術的な差別觀念として儀礼化されているのです。

また、「禊」（以下ミソギ）には本来、清浄な水が使用され、あらゆる不浄や汚穢を除去する機能があり、死忌みの後のミソギは、死体の穢れや死霊の恐怖から逃れようとする意味が強いとされています。

禊は自律的な宗教的儀礼であります。一方の「祓」（以下ハラヘ）は、他立のかつ社会的なもので、個人に対する強制力を持つており、刑罰や追放の機能を持つていたとされています。また、ミソギは後世では、塩や砂を撒いたりすることに變化し、ハラへの行事が混入

することで、身を麻の葉や布あるいは菅や人形を撫でて、穢悪をこれに転移させる呪術的行為を伴うようになるのです。

これは穢悪や厄を転移し、水に流す明らかな「回避」の感情による行為であり、いわゆる「生贄」（スケープゴート）に相当すると考えられます。生贄とは、悪いこと、穢れたことを全て生贄のせいにして神に捧げる最も原始的な宗教儀式です。また、現代のいじめや虐待の行為と構造的な相違はなく、差別的、排他的、非人道的行為と言える情動的な行為です。

梅原猛は、「神話の形で、記紀は一つの思想を語っているのである。（中略）アマテラスの子孫の日本国統治という思想が表面にあるが、その思想を根底で支える思想は、やはりミソギ・ハライの思想である」と結論付けており、政治による律令政策をイデオロギー化する刑罰的意味をもっていたと指摘しています。（次号に続く）

■編集後記

最近の「嫌韓」の報道を観ていると、我々との歴史認識の違いと立場の違いに気づかされます。なぜこの様な関係が過去から現在まで続いているのかという視点の重要性に気づき、その背景を分析しました。日韓関係と差別心を主体的に捉える為に、これ迄に歴史心理学・仏教心理学の視点から影の現象として捉えた内容が、連載してきた「影を内に観るか外に観るか」「神道と仏教の関係」になります。合掌

■西真寺 行事のご案内

竹灯籠祭り

十月十二日、十三日（土日）演奏十八時より

報恩講

十月十三日（日曜日）十時

京都本山参詣旅行

十月十六日から二泊三日（水木金）六時集

合